

物資の届け・聞き取りでセンターの役割鮮明に



大きく傾いた能登島の和倉温泉・加賀屋



トレーラー型仮設



第1仮設を訪問、物資の届け、聞き取りをする近藤・能美市議ら



能登島町の第1仮設のトレーラーハウスで12日、能見市から、18歳〜20歳の青年、能美市議など、ボランティア7人とセンタースタッフ3人の計10人で能登島町の第1仮設を訪問、16軒と対話しました。

トレーラーハウスは4畳半2部屋、IH付きのキッチン、風呂、エアコンが備えられています。どこでも支援物資は歓迎されます。

仮設内の居間にボランティアを入れてくれた平山さん(写真左)は、「地震保険はわずかしが出ないが、半壊した自宅は、(大枚かけて)改修中だ」と語ります。

「全壊したけど、自力で建て替える」という人も中にはいましたが、大方は、「全壊、半壊した」など、被災現場の自宅の様様を語る一方、壊れた自宅から「息子に頼んで、大事なものを少しでも運び出した」「公費解体を申請しているが、いつのことになるのか」と不安を寄せます。多くは、「仮設後は低家賃の公営住宅か老人ホームに住みたい」と語る方もおられました。

災害ゴミの分別収集は柔軟にすべき

過日、珠洲市蛸島町で全労連再隊対連のメンバー15人は赤紙の貼られた一部損壊家屋の災害ごみ処理の支援に入りました。軽トラック2台で積み込み、鉢ヶ崎の災害ごみ仮置き場に持ち込むと、一般ごみが含まれていたことを理由に、受付を拒否されました。輪島市の場合、災害ゴミ

の処理は、自宅の近くに持ってくれば、業者が取りに来ます。珠洲市は被災者の責任で災害ごみを仮焼き場に持って行かなければならないことも大変です。東北震災の対応と大きな違いがあり、珠洲市にも柔軟対応をするよう、国・県の行政指導を求めたい。